

令和8年度 国立中央青少年交流の家 教育事業

富士のさと 防災・減災教育キャンプ

令和8年7月11日（土）～7月12日（日） 1泊2日



1.趣旨

「もしも災害が起こったら」を想定し、不自由な環境下で自ら考え、工夫して生活をするを通して、自助・共助の重要性を感じ、実践する機会を提供する。また、災害を自分事として捉え、自衛隊との活動を通して公助について学び、災害時に自分や周囲の人のために考え、助け合いながら行動できる力を育む。

2.参加者

41名（募集20名、応募47名）

うち4年生16名、5年生17名、6年生8名

スタッフ

法人ボランティア：5名（高校生1名、大学生1名、社会人3名）

社会教育実習生：9名（大学生9名）

3.協力

陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地

4.協賛

能美防災株式会社

5.事業内容

7月11日（土）（1日目）		7月12日（日）（2日目）	
10：00	受付開始	6：30	起床
10：30	開会式	7：00	朝のつどい
11：00	出会いのつどい・仲間づくり活動	7：20	朝食（非常食体験：能美防災株式会社提供）
12：00	昼食（レストラン食）	8：00	テント片付け
13：00	自衛隊講話・災害対応シミュレーション	9：00	電気と水道が復旧！
15：00	被災に備える準備タイム（野外活動棟） ・テント設営（キャンプ場中段） ・飲み水の確保 など	9：00	火起こし・薪割り体験
		10：30	野外炊事：防災カレーライス作り
		14：30	振り返り
18：00	入浴（シャワー棟）	15：00	閉会式
18：30	電気と水道が止まる！？被災体験スタート	15：30	解散
19：15	夕食（非常食体験：各家庭から持参）		
20：00	電気が使えず、 水も限られた中での生活体験		
21：30	就寝		

【事業1日目】7月11日（土）

（1）出会いのつどい・仲間づくり活動

参加者、自衛隊員、スタッフが互いに打ち解け、活動しやすい雰囲気をつくることを目的として、チーム対抗のリレーやフラフープリレーなど、全5種目のレクリエーション活動を実施した。各種目では、チームごとに作戦を話し合いながら協力して取り組み、参加者同士が自然と交流を深める様子が見られた。

活動当初は、初めて出会う参加者や自衛隊員との交流に緊張した様子も見られたが、活動が進むにつれて笑顔が増え、自衛隊員もチームの一員として積極的に活動へ参画するようになった。子供たち、自衛隊員、スタッフが一緒に話しかけ、励まし合いながら活動する場面も多く見られ、一体感のある明るい雰囲気が醸成された。

（2）自衛隊講話（講師：陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地 広報班長 堀様）

「自助」「共助」「公助」といった災害時の基本的な考え方や、自衛隊が担う災害派遣活動について、画像や映像を用いながらご講義いただいた。参加者は終始真剣な表情で話を聞き、災害時に必要な行動や備えについて理解を深める様子が見られた。

また、災害時には1人1日当たり約3Lの水が必要である一方、非常時には十分な水を確保することが難しいことから、日頃からの備えや限られた水を大切に使う意識の重要性について学んだ。これらの内容は、その後に実施した災害対応シミュレーションや被災生活体験において、水の確保や節水方法を考える際の基礎となり、参加者が主体的に行動するための効果的な導入となっていた。

（3）災害対応シミュレーション（テント設営、飲み水の確保）

夜間の被災生活体験に向けた準備として、テント設営と飲み水の確保に関するシミュレーションを実施した。テント設営では、参加者が主体となって協力しながら取り組み、スタッフや自衛隊員は必要に応じて補助を行った。参加者は、一人では設営できないことを実感し、互いに声を掛け合いながら役割を分担して活動する様子が見られた。

飲み水の確保では、資料をもとに災害時における節水の方法について話し合い、限られた水をどのように使用するかを考えた。また、自衛隊員から実際の災害派遣時の経験や現場での工夫について話を聞くことで、災害時に必要な判断や備えについて理解を深めることができた。これらの活動を通して、参加者は夜間の被災生活体験に向けて、協力して課題を解決することや、限られた資源を有効に活用することの重要性を学んだ。

（4）被災に備える準備タイム

災害発生後の生活を想定し、避難生活に必要な準備を参加者自身で考え、行動する準備のための時間を設定した。参加者は、テント設営を行ったほか、段ボールや銀マットを活用してテント内の環境を整えたり、断水を想定して必要な水を確保したりするなど、限られた環境の中で快適に生活するための工夫を行った。また、懐中電灯の準備や使用方法の確認など、電気が使えない状況を想定した備えにも取り組んだ。

活動では、高学年の参加者が中心となって作業の進め方を考えたり、下級生に声をかけたりする姿が見られた。また、各班では「何を優先して準備するか」を相談しながら役割分担を行い、自分たちで考えながら行動する様子が見られた。

本活動は、災害時に必要となる物や環境を自ら考え、限られた資源の中で優先順位を判断する力を育むとともに、仲間と協力して困難な状況を乗り越えるための意識を高めた。

（5）電気が使えず、水も限られた中での生活体験

災害によってライフラインが停止した状況を想定し、キャンプ場でのテント泊を通じた生活体験を実施した。活動中は、夜間に懐中電灯の明かりのみで過ごすなど、普段当たり前に行っている電気がない環境を体験した。また、水については1人あたり1リットルのみ使用できる設定とし、夕食作りを始める前に限られた水をどのように使うかを考える時間を設けた。

参加者からは、「水が足りないかもしれない」「電気がないと困る、怖い」といった声が聞かれ、普段の生活との違いや不便さを実感する様子が見られた。一方で、限られた環境の中でも工夫しながら生活することを楽しみ、仲間と協力して課題に取り組む姿も多く見られた。

本活動を通して参加者は、災害時には普段の生活が大きく制限されることや日頃からの備えの重要性を体験的に学ぶとともに、困難な状況でも工夫して対応する力を身につけた。

事業1日目の様子



仲間づくり活動



自衛隊講話



災害対応シミュレーション



被災生活体験

【事業2日目】7月12日（日）

（6）火起こし・薪割り体験

災害時に電気やガスが使用できない状況を想定し、火を確保するための技術を学ぶ「火起こし体験」を実施した。活動では、ファイヤースターター、マッチ、鉈を使った薪割りの3つのブースを設け、参加者がローテーションでそれぞれの体験に取り組んだ。

初めて火起こしに挑戦する参加者も多く、特にマッチを擦った経験がない参加者も多く見られた。ファイヤースターターについては着火が難しく、参加者全体でも約5名程度しか火を起こすことができなかったが、効果的な方法を考えながら何度も挑戦する姿が見られた。

参加者にとっては、災害時には電気やガスが使えないため直接実際の火を扱う場面があることを学ぶとともに、火を使用する際の安全管理や慎重な行動の大切さについて理解を深めた。

（7）野外炊事：防災カレーライス作り

災害時でも限られた水や道具を活用して食事を準備する方法を学ぶため、防災カレーライス作りを実施した。本活動では、ポリ袋を使用した簡易調理を取り入れ、通常の野外炊事よりも洗い物を減らし、水を節約できる調理方法に挑戦した。また、食材についても、災害時の調理環境を考慮し、火の通りに不安がある肉類の代わりにソーセージを使用するなど工夫した。

9名程度の班ごとに活動し、役割分担は参加者同士の話し合いによって決定した。各班では、互いに声を掛け合いながら作業を進め、調理分担について相談したり、協力して課題を解決したりする姿が見られた。一方で、ポリ袋に穴が開いてしまうなどの失敗もあったが、原因を考えながら改善しようとする様子も見られた。

完成した際には、袋に入れて湯せんするだけでご飯が炊けることに驚く参加者も多く、限られた水や資源の中でも、工夫次第で温かい食事を準備できることを体験的に楽しみながら防災調理を学んだ。

事業2日目の様子



火起こし体験



薪割り体験



防災カレーライス作り



集合写真

6.事後アンケート（回収率97% 41名のうち1名早退のため未回答）

（1）事業に対する評価

Q この事業全体の満足度はいかがでしたか？（事後アンケート）

満足	やや満足	やや不満	不満
37名（92%）	3名（8%）	0名	0名

Q 心にのこった活動を3つまで選んでください

活動名	回答
なかまづくり（はじめてのレクリエーション）	15名（37%）
自衛隊のお話	10名（25%）
災害対応シミュレーション（自衛隊との勉強）	4名（10%）
テントを立てたり、準備をしたこと	29名（72%）
電気や水が使えない生活	20名（50%）
非常食を食べたこと	15名（37%）
火おこし	15名（37%）
防災カレー作り	14名（35%）

Q このキャンプで、「できそう！」と思ったことはありますか

項目	回答
自分で考えて行動する	28 名 (70%)
水や食べ物を大切に使う	27 名 (67%)
困っている人に声をかける	20 名 (50%)
友達と協力する	34 名 (85%)
家族にキャンプのことを話す	27 名 (67%)
災害にそなえて準備をする	24 名 (60%)

Q 家に帰ったらやってみたいことを書いてください ※一部抜粋し、原文のまま掲載

- ・防災バッグをつくってみる
- ・家から近いひなんじょをしらべてみる
- ・ハザードマップや防災バッグをしてみる
- ・長持ちするお菓子や食べ物について調べたい
- ・水をよういする

Q 一番楽しかったことや、一番心に残ったことを書いてください ※一部抜粋し、原文のまま掲載

- ・ご飯をつくったこと（非常食）
- ・テントをたてたこと、水がないと不便だった
- ・みんなといっしょにテントでねたこと
- ・電気や水が使えないときのこと
- ・火おこしでマッチやファイヤースターターを使えて楽しかった
- ・友達と協力できて、自分の力も出せたこと

7. 成果と課題

(1) 成果

本事業では、災害発生後の不自由な環境を想定した体験活動を通して、参加者が自分自身で考え、仲間と協力しながら課題を解決する力を育むことができた。

事後アンケートでは、事業全体の満足度について、92%の参加者が「満足」、8%が「やや満足」と回答し、全参加者から肯定的な評価を得ることができた。また、心に残った活動として「テントを立てたり、準備をしたこと」が29名(72%)、「電気や水が使えない生活」が20名(50%)と多く選択されており、普段とは異なる環境の中で、自ら考えて生活する体験が参加者の印象に強く残ったことがうかがえる。

さらに、「このキャンプでできそうと思ったこと」については、「友達と協力する」が34名(85%)と最も高く、「自分で考えて行動する」が28名(70%)、「水や食べ物を大切に使う」が27名(67%)となった。これらの結果から、テント設営や被災生活体験、野外炊事など、仲間と協力しながら限られた資源を活用する活動を通して、自助・共助につながる意識を高めることができたと考えられる。

加えて、陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地による講話や災害対応シミュレーションを通して、災害時における公助の役割について理解を深めるとともに、能美防災株式会社の協賛により、実際の非常食を活用した体験や防災用品に触れる機会を得られた。企業や関係機関と連携することで、より実践的で多面的な防災学習の場を構築することができた。

(2) 課題

本事業では、参加者が主体的に活動する場面を多く設定することで、自ら考え行動する力や協力する姿勢を育むことができた。一方で、活動内容によっては参加者の経験や技能の差が見られたため、それぞれの参加者が達成感を得ながら活動に取り組めるような支援方法について、今後も検討していく必要がある。

特に火起こし体験では、ファイヤースターターによる着火に多くの参加者が苦戦する様子が見られた。火を起こすことの難しさを実感するとともに、電気やガスが使えない状況で火を確保するためには、技術や準備が必要であることを学ぶ貴重な機会となった。一方で、参加者がより挑戦意欲を持って取り組み、達成感を得られるよう、活動時間や体験方法、支援の在り方について、今後さらに工夫を図りたい。

また、小学校4年生から6年生までが参加する中で、上級生が中心となって活動を進める姿が見られた一方、下級生の参加者も主体的に役割を担えるよう、活動前の役割設定や適切な支援方法について検討していく必要がある。

さらに、今回の事業では多くの体験活動を通して防災について学ぶことができたが、体験した内容を家庭での備えや具体的な行動につなげるため、活動後の振り返りや学びを発信する機会をより充実させていきたい。